学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	山口　慶子 【人間発達科学専攻　平成２０年度生】	本研究は、妊娠、出産、子育て期にある女性心理臨床家の職業発達を、グラウンデッドセオリーアプローチを用いて検討した質的研究である。他者の成長に寄与する心理臨床家にとって、一個人として子育てを体験することは、臨床家としての機能や援助観に大きな影響をもつことが指摘されてきた。また、臨床家としてのアイデンティティや心理的適応に関する考え方は、母親としての体験を振り返り、統合するプロセスに影響をもっており、二つの領域の交差は、臨床家として職業的成長を捉える上で極めて重要である。本研究では、妊娠期、出産期、子育て早期、復職後の４期に女性臨床家にインタビューを行うことによって、彼らの個人そして心理臨床家としての主観的な成長感および変化を追っている。 第１章と第２章で研究の背景となる文献のレビューおよび研究目的が述べられた。第 3 章から第 6 章では、第 3 章では、母親である心理臨床家にとって、自らの限界を受け容れることが否定的体験から肯定的体験に移行する契機に関わっていることを明らかにした。第 4 章では妊娠期の体験を分析した結果、キャリアにおいて妊娠は第一線から降りることと捉えられており、また妊娠中の心理面接における困難体験は “今ここ”に十分関与できないことに集約された。さらに妊娠を扱う心理面接場面でセラピストは準備段階、一時回避、接近の心理プロセスをたどることを示した。第 5 章では産後の心理臨床家の体験を検討し、出産は身体的・心理的に大きな変容を伴う体験であり、仕事に戻った後の心理面接においても、クライエントの理解の促進や自己一致した臨床スタイルの発展が見出された。第 6 章では追跡調査を実施し、ひとりの人間としてクライエントに現前する姿勢がさらに促進されていることを示した。また 2 事例の発達プロセスを詳細に検討し、共通と相違を同定した。 以上の結果から第 7 章では総合考察を行った。はじめに妊娠、出産、初期の子育て各期における職業的発達を、個人内での動きである“個人的自己”と“職業的自己”の相互作用、およびクライエントとの関わりにみられる臨床スタイルの観点から考察した。また先行研究との関連から、心理臨床家の発達に関する研究、心理臨床実践および臨床心理士の教育・訓練、方法論に関する示唆を述べた。最後に本研究の限界および本研究によって見いだされた課題を挙げ、サンプルを拡大し、大規模な質問紙調査や国際比較を行う展望を述べた。
論 文 題 目	「母親になる」体験をとおした女性心理臨床家の職業的発達　―妊娠、出産、子育ての体験と臨床活動の交差―	
審 査 委 員	（主査）　准教授　岩壁　茂	
	教授　井原成男	
	教授　篁　倫子	
	教授　藤田　宗和	
	准教授　上原　泉	